

大阪長屋の再生——住文化の継承と耐震改修

小池 志保子 Written by Shihoko Koike

大阪の住文化

冬には昼間の暖かい日差しを受けながら障子に映る影を眺め、夏には同じ場所で簾戸の隙間から抜ける涼しい風を感じる。大阪の都心・梅田からほど近い場所にある「豊崎プラザ」の町家では、夏と冬で建具の入れ替えを行い、それぞれの季節の風情が楽しめる。

このような四季を感じる暮らしが日本人の住まい方であった。しかし、現代の生活はエアコン・デিশヨナーに頼りきっており、窓を開けずに暮らす人も珍しくない。季節の気配を感じられるように少し工夫をすれば、日々の暮らしはもっと豊かになるのではないだろうか。

町家と長屋を舞台にした現場プラザ

持続可能な都市再生が叫ばれるなか、建築ストック活用のニーズが増大している。こうした社会の動向を背景に、長屋建築の未来像について所有者の方といっしょに考え、住宅を残して積極的に活用していくことを目指し、「大阪市立大学豊崎プラザ」が誕生した。豊崎プラザは、JR大阪駅から

風東長屋2階。古民家から譲り受けた簾戸を再利用している

徒歩15分のところにある。

およそ300坪の敷地に町家である主屋と5棟の長屋建ての貸家があり、その中央を路地が南北に貫く。この路地は地道のまま残され、植栽が路地を彩り、まち並みが形成されている。主屋と長屋はどちらも大正時代

末に建築されたもので、伝統的な木造軸組構造による建物である。これらの建物は、国の登録有形文化財としても登録されている。

「保存」をテーマとした計画は、とすれば、生活とはかけ離れたテーマパークのようになってしまう傾向がある。しかし、豊崎プラザでは、住人の暮らしをベースに建物を活用することで、生活の知恵に学びながらプロジェクトを進めている。

その要となる特長が、今後も住める場所として長屋を再生しているということである。80年以上も住み続けてきた主屋と長屋に今後もしも住み継いでいくため、その活用方法を探っている。

住む場所と耐震補強

住む場所としての再生にこだわった結果、耐震改修が必要だということになった。木造建築の魅力を感じる暮らしには、安心して眠れる環境が求められる。



地道の路地

町家再生では、なかなか耐震補強が進まないという話をよく耳にする。これまでの行政の対応をみても、伝統的な木造住宅地区は、経済性や防災の観点から除却の対象としか考えられてこなかった。しかし、近年になって、良質な木造住宅を保全し、積極的に活用を図るという考えに変化してきている。

例えば、大阪市でも耐震診断・改修補助が実施されている。この大阪市の耐震補助制度における長屋改修の最初の事例となったのが、他にもない豊崎プラザ西長屋の耐震補強である。連棟の建築物においては、住人の合意形成が非常に難しい。だが、豊崎プラザでは、教員や学生の働きかけによって合意形成が生まれ、補強工事まで達成できたのである。

なぜ豊崎プラザでは耐震補強が実現したのか？ それには様々な要因があると思われる。振り返ってみて、大きく3つの要因を紹介したい。

ひとつめは、伝統的な木造建築に適した耐震補強方法と出会うことができた点である。

豊崎プラザの建築は、柱と梁があらわしになっている真壁づくりであり、竹小舞の上に土を塗り付けた荒壁でできている。そのため、柔らかく粘り強いという特性がある。その特性を生かすために、新設壁も荒壁に近い特性を持つパネルを充填した壁とし、電気配線等も壁を傷めて耐力を損なわないように工夫を施している。なお、耐震補強設計は、限界耐力計算法を用いて伝統的な木造建築に適した構造を採用し、外部の専門家の指導を得て実施している。ふたつめは、複数の専門家がそれぞれの専門分野を生かしながら豊崎プラザに関わっていることである。

プロジェクトの中心となっているのは、大阪立大学生活科学研究科に所属する「住文化史」、「まちづくり論」、「住空間設計」という3分野の研究室であり、さらに構造家や大工工務店などの実務家の協力を仰いでいる。

みつめは、所有者を中心とした良好なコミュニティが存在していることである。

長屋には古くからの借家人があり、なかには80年近く住んでいる



実習風景。学生が糊に和紙を張っている

という方もいる。私たち教員や学生が路地を歩いていると、所有者を含めたすべての住人と挨拶をかわすことができる。学生のこともずいぶんとかわいがつてくれている。

暮らしのかたちと生活の知恵

改修工事を通しての施工実習では、襖の張り替えやオイルによる木部塗装を行った。

襖の張り替えでは、小麦粉を3時間ほど煮込んでつくった糊で襖用の和紙を水張りした。真壁であらわになっている柱などの木部は、オイルを浸した布で磨いてつやを出した。

住みこなすための知恵は、住まい手によって日常的に維持されてきた。しかし、現在ではそのほとんどが忘れ去られている。実習に参加した学生からは、「やってみたら意外に簡単でびっくりした」、「やったら効果があることが実感できた」などの意見が寄せられた。

長屋住まいは、世間では「時代遅れ」と言われ、所有者から見放されていた。それにも関わらず、木造建築の良さ、技術の確かさ、住人の暮らし方などを目の当たりにして、「ほんまもん（本物）に出会った驚き」を学生たちは口々に語った。

改修された長屋には、ほうきがよく似合う。ほうきという昔ながらの道具がうまく機能する。露台に面してはめられた簾戸は、もう壊されてしまった民家からいただいたものを再利用した。

ここには、さまざまな生活の知恵が息づいている。その魅力に、私たちはすっかりとりつかれてしまった。

◆小池 志保子（こいけ・しほこ）

大阪立大学大学院生活科学研究科助教。1976年兵庫県生まれ。2000年京都工芸繊維大学大学院博士前期課程修了。00年～02年中村勇大トリエ勤務後、ウズラボ一級建築士事務所共同設立。